



第23号  
2019年4月



◇新潟まち遺産の会会報 第23号  
2019年4月27日発行  
◇新潟まち遺産の会 (代表 大倉 宏)  
〒951-8066  
新潟市中央区東堀前通1番町353  
E-mail: chanoma@machi-isan.sakura.ne.jp  
TEL 025-228-2536 / FAX 025-228-2537  
ブログ: machi-isan.blog.jp

## まちなみネットワーク〈にいがた美しいまちなみフォーラム2018〉へ参加

新潟県まちなみネットワークは、県内の「まちなみ」に関わる人達が交流して情報交換や相互学習をするために、2006(平成18)年に設立されました。年に一度各地持ち回りで開催する大会では、シンポジウムや地元団体の案内でのまちあるきを行なっています。

これまで新潟市、赤泊、相川、出雲崎、糸魚川などで開催してきました。2018年度は高田に集まり、先駆的なまちづくりが進む金沢についての講演と、まちあるきが2コース用意されました。

〈フォーラム2018〉に参加して

フォーラムに参加して、一番心に残っているのは、「美しいから」残すのではない、何百年もあり続けてきた理由としくみが本当の美しさを纏うためであると話してくださった団体の一言です。なぜ保全するのか、どんなまちづくりをおこなっていききたいか勉強になりました。また、高田の街歩きに参加して高田城を囲む何重もの河川により城を敵から守っていたことを現在の地図や、絵図、実際に歩いてみて知ることができました。地形を利用して防壁していた街の意図を知ってから歩くことで、新しい視点で楽しみながら街歩きに参加することができました。(田中裕利子さん)

## 全国町並みゼミ長野松代・善光寺大会へ参加

長野市には戸隠と松代という、善光寺以外にも人が多くおとずれる観光スポットがある、ということを知り、今回参加して知りました。

会場となった松代は真田家十万石の城下町。市民団体の地道な活動もあり、2000年代になってようやく歴史的な建物やスポットの保存整備が徐々に進み、今回の「ゼミ」開催は町にとっても大きな画期だったようです。

「元気玉」を観衆に発射した長野市長のスピーチも印象的でしたが、基調講演をした西村幸雄さんが若い頃、松代の調査をして、泉水路という水のネットワークが町に張り巡らされていることに注目したという話も面白く、2日目の午前中の町歩きでも、町中を流れる小さい川沿いの道が印象に残りました。長野の町らしく、町全体が傾斜の中にあり、その傾きを伝って流れる泉水路が武家屋敷だった家々の庭に引き込ま

れ、また隣家に流れていくというユニークなシステム、どの庭も象山を借景にするよう作られているとの説明にも驚きました。象山ふもとの山寺常山邸の小部屋の窓から覗いた紅葉が、大変美しかったです。

私の参加した第5分科会では松代や奈良今井町や岡山山の倉敷の現状のお話を伺って「学び」になるとともに、各地域に、古い建物と今の生活を結びつけようと努力する静かで息の長い活動が続いていることを知りました。今の新潟市に足りず、必要なことについても、あれこれと考えさせられた2日間でした。

3日目の全体会では総司会という大役をいただいて緊張しましたが、深夜まで作業したという学生たちの分科会報告に、今年も感心しました。

その午後訪れた、岩山の象山中に掘られた戦争末期の巨大防空壕にも、忘れがたいものを覚えて帰ってきた、密度の濃い旅でした。(大倉)

## □□ 2018 年度活動報告 □□

当会は 15 年前、新潟島にあった 1 軒の町屋の取り壊しの危機を契機に誕生しました。当時の新潟市では画期的だった町屋見学やまちあるきを開催し、次第に活動範囲を広げて現在に至っています。

これまでに行なったシンポジウムなどでは、保存と活用の手法、伝統家屋の良さを保ちつつ住みやすくするための改修方法、全国各地のまちづくり活動の紹介、木造建築の防災などなど、様々な角度から保存活用についての先端知識を発信してきました。また、旧齊藤家別邸や旧會津八一記念館などが取り壊しの危機に瀕したときに保存を訴える活動を行ない、保存活用につなげてきました。

その間日本全体で歴史的建造物への関心が高まったことも追い風となり、新潟でも古い建物が市民の貴重な財産であることが理解されてきて、各地で保存活用の団体が生まれました。

とはいえ、建物の保存活用が難しいことには変わりはありません。貴重な建物が取り壊されていく状況は変わっていませんし、保存はしたものの、その後の活用の継続に苦勞する例もままあります。

近年は、歴史的な建物や町並みを守るために必要な法律についても、講演などを通じて考えています。

2018 年度の活動は次のようなものでした。

◎シンポジウム「ふるまち最前線—活動の軌跡と展開」  
地元の方々とともに、伝統文化と歴史的な町並みが残る新潟古町花街での活動を振り返り、今後の展開を考えました。 6 月 17 日開催

◎旧花岡邸公開  
邦楽の師匠の自宅兼稽古場であった建物を、シンポジウムに併せて公開しました。公開はこの数年、年 1 回ほど行なわれています。 6 月 17 日開催

◎座談会「たかが登録、されど登録—登録文化財って何？」  
実際に登録有形文化財や指定文化財をお持ちの方々に経験を語っていただき、法律の面からの実際を考えました。 6 月 23 日開催  
共催事業は次のものを行ないました。

◎連続講座「初心者のためのふるまち新潟をどり鑑賞講座」(全 2 回)  
毎年開催している、市山七十世さんや芸者さんに、踊り鑑賞のツボを解説していただく講座です。 8 月 31 日、9 月 14 日開催

その他、世話人有志が、全国町並み保存連盟(長野松代・善光寺大会)、新潟県まちなみネットワーク(高

田大会)の大会に参加しました。詳細は 1 面をご覧ください。

2019 年度は引き続き、法律について考えていきます。6 月 9 日に開催するシンポジウム『「歴史まちづくり」の未来』も「歴史まちづくり法」を紹介し、共に考えるためのシンポジウムです。(千早)

### 銀幕に残る昔

世話人リレーエッセイ

古い邦画を見ていると、撮影当時の家や町並みに目が止まることがあります。私が見る範囲では東京の風景が圧倒的に多いのですが、今はもうなくなってしまった光景が偶然のように現れると、つい、ここはどこかと映画とは関係のないことを考えてしまいます。

都電が走っている銀座、丸の内のモダンなビル、開発前のがらんとした渋谷駅前、英語が併記されている道路標識、首都高のない広々とした日本橋。

家の中はセットですが、当時の観客が違和感を抱かないような、当たり前の家やアパートが生活ぶりともども描かれています。戸建ての引き戸の玄関、廊下、畳の座敷とちゃぶ台。テーブルが置かれているのはモダンな家です。

まだテレビがなくて、タンスの上に大きなラジオが乗っていたり、天上からぶらさがった電灯を灯すときは手を伸ばして電灯の横にあるスイッチをひねったり。

この、凝ってもいないし贅沢でもない当たりの家は、次第に姿を消しています。どんどんリフォームされるし、保存するほどの家でもないと取り壊されるのが、普通の家運命でしょう。とりわけ 4～50 年しか経っていないような家は、残すには新しすぎると思われてしまう。それだってあと数十年待てば十分に古い家なのですが。

日常生活で使い込まれるからこそ手が入って原型を留めず、あまり使われないと建築当時の姿が残って貴重になるというのは、皮肉と思えないこともありません。

それでも、こうした普通の家を使ったレストランやお店も目につくようになりました。立派な建物だけでなく、そんな「無名の」家も、住む人がいなくなっても長く使われていってほしいものです。(千早)

□編集後記□ 世話人一同多忙な中原稿を集めるのも大変で、23 号は 2 頁になりました。でも次号は 4 面にします!